

夏期林間保育實施報告

神戸幼稚園保母 豊島 とも

一、林間保育施行の理由

文化の開展に伴へる商工業の進歩と交通機關の發達は都市の發展となり彼我相俟つて空氣清澄樹木鬱蒼たる閑靜境を次第に變じて黑煙濛々熱鬧轟々たる非衛生的地と化せずんば止まざらんとす。

従つて都市の幼兒の身體は虛弱に傾き疾病に對する抵抗力弱く、或は腺病或は消化器病、呼吸器病、貧血等不健康なるもの益々生ず、國家の將來を思へば實に看過するに忍びざるものあり。

常に身體の方面に止らず他面に都市の幼兒は自然界と接觸する機會乏しく徒に人爲的刺戟の送迎に暇なく遂に幼兒の神經中樞を紊亂せしめ爲に些細の感情にも動き易く、意志弱くして遠大の思慮

を缺く者の多きを見るが如き感あるは等しくこれ都會の繁雜な生活狀態の然らしむるに非ざるか、實に國家の前途を擔へる幼兒の不知不識して神經過敏の病弊に陥らんとしつゝあるは誠に黙止に堪へざる所なり。

吾等幼兒保育の任に當れるもの、極力これ等諸弊を削除して幼兒心身の健全なる發達を期せんとして特に其體育に留意すること積年（大正二年四月より大正六年三月に至る四年間）毎月施行せし身體検査によりて見るに夏季溫度上昇の季に向ふや幼兒の身長は發達の著しき時期なるに拘らず其の體重の減少を發見せり特に腺病質消化器病神經質貧血等の幼兒に於ては其一層著しきもの、如くなるを認めたり。

於是乎吾等躊躇することなくこれ等の身體虛弱者を一團として林間に於て幼児の自發活動に基ける純自然の保育を施行すれば或は此の傾向を矯正することを得べきかと想到せり。

勿論今日吾等の園内に於ける保育の方針も體育を主眼とすと雖も集團的幼稚園生活に於ては其必然の結果として多少の訓練的又形式的方面を全々捨て去るを得ず依て全くそれ等の拘束を離れたる林間の保育を施行してこれ等幼児を出來得る限り空氣清涼環境浩濶にして



愉快なる生活の下に置き都會生活より來る諸種の

弊害より救はんとせり。

抑々我が神戸幼稚園に於ては常に心身共に雜鬧なる市街の家庭生活に於けるよりも衛生的なる境遇を幼児に與へんと努力するのみならず平時は隔日に郊外保育を勵行しつゝありと雖も夏季に於ては途中炎熱堪えがたく且保育時間短縮の爲め豫期の効果を收め難きを以て今回試に早朝より夕刻に至る林間保育を企つるに至りしなり。

要するに今回の林間保育實施の理由は園兒二百の中特に身體虛弱又は神經過敏

なりと認めたる幼児を撰み此等の幼児の夏季に於ける身體發育を向上せしめ併て將來に於ける保育の方針を樹てんとするにあり。

二、保育者

園長望月クニ子氏指導のもとに不肖主任として専ら其任に當り、園醫倉地同之助氏は顧問となり、保母石田ユキ子、長塚政子、高田福子、住田はる子、野藤直子の五氏隔日に之を補助せらる。

三、林間保育施行幼兒

(イ) 左の條件に該當せしもの

- 一、身體虛弱と認められ園醫の診断により林間生活の必要ありと認められたる者
- 二、神經過敏にして刺戟少き林間生活を營むを以て適當なりと認められたるもの
- 三、病後林間に於て十分なる運動と新鮮なる空氣の呼吸及適度の飲食物の供給及休息等によ

(ロ) 幼兒數

りて健康を回復せしめんとする者

二十一名

最初より加入せしめしもの十三名
成績可良なりしたため中途より加入せしめし者八名

之を體格によりて分類すれば左の如し。

1. 體格弱なる者十六名
2. 同 中なる者四名(中神經過敏三名病後一名)
3. 同 強なる者一名(病後一名)

四、時 日

自大正六年六月二十二日

至大正六年七月二十日

自午前八時 至午后四時

五、場 所

一、屋外

諏訪山を中心とせる附近の林間

二、屋内

イ、自六月二十二日至七月七日十六日間は、諏

訪山麓武徳殿弓場休憩所にして多少狹隘且通

風稍全からず殺風景のきらひありき。

ロ、自七月八日至七月二十日十三日は諏訪山中

腹妙見寺下なる澤田善一郎氏別荘なり、こゝ

は廣潤なるが上に採光通氣良好にして風景絶

佳前栽の樹木鬱蒼として時に蟬しぐれの聲を

聞き一望の下に收むる大洋の白く輝く浪を渡

りて不斷の涼風訪れ來りために苦熱を忘るゝ

處なり。

大部分の保育を行ひたる諏訪山附近一帯の地は都

市炎熱雜鬧の域を離れ北には打ちつづく山を負ひ

南の方即前面は市街を隔て、大海を一望の内に收

むる高燥なる臺地なり。加ふるに人境遠く風致上

悪影響を蒙るが如き憂ひ無く、神社有り佛閣あり

實に神戸市景勝の地と稱すべし特に林間保育には

眺向きの松林あり潮水と樹木とによりて調節せら

れたる新鮮なる空氣は各自の肺活量に比例して思

ひの儘に呼吸し得べし。

更に幼児生活上の材源とも言ふべき自然界の現

象に缺くる事なく鳥飛び蟬鳴き蝶は幼児といづれ

劣らぬ舞ひ振り見せて、摘みても盡きぬ草花は地

に綾なし掬しても余りある自然界の無限の趣は事

毎に幼児の興味をそゝり好奇の心を起さしめ不識

して幼児の睿智を啓發せしめざればやまず、更に

又土地の高低は幾多の坂となりて、一つには幼児

の運動の量を多からしめ又身體活動に變化あらし

む。

六、保育の方法

(イ、遊戯)

幼児の欲するが儘に恩物を貸與する事あり、自然物其他によりて製作する事あり動作遊戯を行ふ事

あり談唱する事あり只之等を行ふに當りては常に

て適度の運動をなすことは體育上、有効なれども

幼兒の内的生活の表現に
委せ自由に一齊に個々に
時に臨み機に應じ之が善
導に努めたり、大體は自
由に委するの遊戯方針を
採り些かにても規則的な
りと認めらるる事を爲す
に當りては幼兒其時々の
心身の狀態疲勞の程度に
照して彼等が少しにても
窮屈に感ずるが如き場合
には害なき限り之を看過
せり。

遊戯中にて彼等の好む
ところの一つは歩行に基
く遊戯なればこの自然の
傾向を可成重じたり而し



運動の分量と種類とは各人の體質に相當せざれば効果少し而して歩行する事は其運動量に於て各人の體質に應じ又全身運動法としても適當なりと稱せらるゝを以てなり。

次に彼等の好むところは自然物を材料としての實生活の模倣なり而して此の材料の無限にして幼兒の要求を満足せしめ得たるは該保育の長所なりとす。

(ロ)、晝食

午前十一時三十分頃各自携帯せる辨當を用意し手洗ひ口嗽ぎ自由に愉快に話し

つゝ食する事園内に於けると同様なり。

(六)、午 睡

午後一時頃より三時頃に至る間に行ふ、通氣好き座敷に毛布を敷き腹部に毛布を被ひて午睡せしむ準備として各幼兒は鞆前掛けを去り帯紐を寬にし身體の汗を拭ひ去り氣持良き境遇の内に心安くねむりに入る。寢付き悪しき者には軽く柔かく歌ひつゝ添ひ寐して寐つかしむ。

(ニ)、間 食

午後三時頃。

品質はパン類キャラメル、ビスケット、カステラ
ーラの類、分量は一人一回三錢平均。

次に日々幼兒の生活状態の大略を示さん(勿論確定せるものに非ず幼兒の刹那刹那の状態によりて變化ありしなり)

一、幼稚園出發(午前八時前後)

林間近傍の者は暑氣加はるに及びては直接目的地に到らしむ。

一、途上の状態

園長望月クニ氏及有志者生島四郎左衛門氏邸に立寄りて休憩し且つ欲する者には飲料水(白湯又は冷麥茶)を與ふ。幼兒の心の嚮ふがまゝに此處にても或は談唱し或は自由遊戯する事あり、其他風涼しき樹下清潔なる石階等彼等の意に委せ休憩せしめたり。

一、目的地到着(九時三十分より十時三十分)

一、洗足履物整頓

一、氏名點呼

一、所持品整理

一、隨意室内休息

一、遊 戲

恩物を貸與し或は製作遊びをなさしめ或は自然に接觸せしめつゝ林間にて自由遊戯談唱等幼兒の心意の嚮ふがまゝにし、又天候に徴し、幼兒疲勞の狀に鑑みて殆んど彼等の自發活動を補導するに止り、全然家庭的なり。

一、晝食(午前十一時三十分)

一、室内休息(日々出席表に貼紙す)

一、午睡準備

各自保姆の援助により毛布を敷き枕を携へ來り

鞆前掛、帶等を脱す。

一、午睡(午後一時頃より三時頃まで)

一、身仕度

覺醒せし者より順次洗面、結髪、身體の冷水拂拭。

一、自由遊戯

午睡後は不思議にも自然に庭園の植込の樹蔭に
莫塵を敷きて遊びたり之幼兒の活動は午睡後には
稍遲緩なるためならんか。

一、間食(午後三時後)

準備の洗手後快談しつゝ、楽しく行はる。

一、最後に全兒を統合して談唱などを行ふ。

一、歸宅準備

一、退出(午後四時後)

七、衛生方面の注意事項

一、林間保育を施行せんとせる幼兒は必ず一度醫師の診斷を受けしむ。

一、常に急救藥品類を準備す。

一、晝食事は其辨當の量、品質、咀嚼の程度に注意す。

一、飲食、睡眠、疲勞の狀態等は出來得る限り毎日家庭との連絡を保つことに留意す。

一、間食は各幼兒一定のものを與ふ。

一、飲料水は必ず一度煮沸したるものを用ひ其分量に注意す。

八、成績

イ、身體上

一、體重の著しく増加せしこと(別に項後に解説す)

一、皮膚赫褐色となり抵抗力を増したるもの、

如し。

一、食慾を増進せしめし事（施行前食慾の進まざりしもの三四名ありしがこれを回復せり）

一、健脚となりし事。

一、活動に馴れたること。

ロ、精神上

一、友誼を篤うせしこと。

變化ある生活即丘あり坂あり樹あり花あり鳥あり蟲あり苦樂伴へる環境内にありて長時間共同の生活をなす間には自ら互に優良の感情を養ひ得たり。

一、保育者と幼児との關係密接になり殆んど母子の情を生ず（個性の觀察を便ならしめしこと多大なり）

一、浩然の氣象を多少なりとも養ひ得しこと。

一、智能の啓發はもとより期するところにあらざりしと雖も從來識らざりし方面の知識を得し事と信す。

○身體的方面の發達狀態解説

1. 身體の検査

林間保育實施の第一日即六月二十二日（金曜日）の朝より始め一週間毎に石田保姆體重、身長、胸圍を測定し之を各個のカードに記載し且つ園醫倉地同之助氏は最初及最終に於て健康診斷を行へり。

2. 結果

保育せし幼児は計二十一名にして最初より加入せるもの十三名内にて四週を通じて皆出席者七名を採りて全體の成績を調査せり。

身長	人數	增加量				胸圍	人數	增加量												
		着 手 一 週 後	着 手 二 週 後	着 手 三 週 後	着 手 四 週 後			着 手 一 週 後	着 手 二 週 後	着 手 三 週 後	着 手 四 週 後									
7	329 <small>分</small>	330	330	330	331	2 <small>分</small>	7	367 <small>分</small>	370	371	375	377	10 <small>分</small>	7	164 <small>分</small>	165	165	165	166	2 <small>分</small>

身長、胸圍は分を單位とし以下四捨五入す
 體重は十匁を單位とし以下四捨五入す

九、在園兒の比較

林間保育の成績身體的方面の中身長、胸圍等は暫く措き今茲には體重のみを普通の兒童の發達と比較せんとす。

(イ)、大正五年夏期市内神戸楠兵庫城口の四幼稚園協同調査にかかる成績は左の如し。

(1) 調査人數 四十四名。

(2) 調査期間 自大正五年六月十九日至十月二十五週間なるも今此處に比較のため引用せんとするは其一期間即梅雨期の中始めの四週即ち自六月十九日至七月十七日。

(3) 保育時間 各幼稚園内にて普通半日保育。

(4) 成績 一般に梅雨期は體重の増加せざる傾向あるにや左の如き結果を得たり。

(ロ)

大正六年五月より楠幼稚園に於て毎週體重を調査せられつゝある成績は左の如し。

(1) 調査人數 八名。

(2) 調査期日 自大正六年六月十八日至七月十七日四週間を引用す。

(3) 保育時間 楠幼稚園内にて普通保育(半日保

育)

(4) 成績

體重
 増加(上昇標式)十二人
 體格強(25%)中(50%)弱(25%)
 増加して減少(混合標式)七人
 體格強(57%)中(14%)弱(29%)
 減少(下降標式)廿五人
 體格強(40%)中(48%)弱(12%)

體重
 増加(上昇標式)三人
 體格強(33%)中(57%)弱(0%)
 減少後増加(混合標式)三人
 體格強(0%)中(100%)弱(0%)
 減少(下降標式)二人
 體格強(50%)中(50%)弱(0%)

(六)、林間保育成績

(1) 調査人員 七名。

(2) 調査期日 自六月二十二日至七月二十日四週

(3) 保育時間 林間終日保育。

(4) 成績

體重比較表 (一)

昇式	園名	人員數	最	一	二	三	四	增加	分
			初	週	週	週	週	量	人員
昇式	大正五年神、兵、楠、城、四園の調	12	402 <small>四百十名</small>	403	406	406	409	7 <small>十名</small>	27%
	大正六年楠幼稚園の毎週調	3	438	442	440	447	447	9	37%
	大正六年今回林間保育の調	6	355	357	357	365	366	11	86%
混合式	園名	人員數	最	一	二	三	四	增加	分
			初	週	週	週	週	量	人員
			初	週	週	週	週	量	人員
混合式	神 兵 城 楠	7	433 <small>四百十名</small>	434	436	435	433	0	16%
	楠 幼 稚 園	3	450	449	442	445	449	-1	37%
	神 戶 林 間	1	440	428	435	435	440	0	14%
降式	園名	人員數	最	一	二	三	四	增加	分
			初	週	週	週	週	量	人員
			初	週	週	週	週	量	人員
降式	神 兵 楠 城	25	439 <small>四百十名</small>	436	435	436	430	-9	57%
	楠 幼 稚 園	2	426	423	424	423	419	-7	25%
	神 戶 林 間	0	0	0	0	0	0	0	0

(二)、前記三種の調査を一覽表に示せば次の如し。

體重比較表 (二)

園名	人員數	初	一	二	三	四	平均
		週	週	週	週	週	一人
大正五年神、兵、楠、城、四園の調査	44	428 <small>四百十名</small>	427	427	428	425	-3 <small>十名</small>
大正六年楠幼稚園の毎週の調査	8	440	440	438	440	441	+1
大正六年今回林間保育の調査	7	367	370	371	375	377	+10

增加(上昇標式)六人
 體格強(○)中(17%)弱(83%)
 體重減少後增加(混合標式)一人
 體格強(○)中(○)弱(100%)
 減少(下降標式)○ 體格

十、参考の爲め

該保育施行期間の氣壓、氣溫、濕度の表を示せば左の如し。

但し便宜上所定の週間内神戸測候所調査の毎日平均溫度、濕度、氣壓の各を加へ之を七等分して其次週の溫度、濕度、氣壓と定め之によりて曲線を作りたり。

要するにこの方法により幼児の體重が氣象と何等かの關係あるなきやを見んとせしなり。

氣象表

		第一週	第二週	第三週	第四週	第五週
大正五年度	氣	753 <small>程</small>	753	752	753	755
大正六年度		750 <small>程</small>	753	750	753	757
大正五年度	溫	74 <small>度</small>	76	75	77	76
大正六年度		69 <small>度</small>	77	81	78	82
大正五年度	濕	82	86	86	82	80
大正六年度		79	76	83	82	68

今林間保育は特別なる試みなるを以て暫く措き同じ境遇の下にある大正五年及六年の撰擇せざる普通の幼児の體重發達と氣象との關係を考察するに氣壓は兩年大差なきを以て之を省略し單に濕度と溫度を比較するときは左の如し。

	溫度	濕度	體重
大正五年	低	高	32% 68% <small>並</small>
大正六年	高	低	60% 40%

これを以て見れば溫度の高低よりも濕度の高低の方體重に影響あるもの、如し。

十一、結論

比較表(一)により體重増加の人員百分比に於て見るに體重の上昇せるもの、率、四園調査の57%、楠の37%なるに比して林間保育の85%なることは即體重の増加せる人員の極めて多きを示すものにして混合式(6%)(四園)、37%(楠)に對し林間保育の

は即其人員一名なりしこれとて決して體重を減少したるものにあらず、更に體重を減少せる人員百分比は四園調査の $\frac{1}{10}$ に對し林間保育に在りては一名もなしこれを以て見るも林間保育の効果の著しきものなるを知るなり。

1. 勿論三種の調査は同一幼兒を行ひたるにあらず多少各兒の個性境遇には相異ありしとは雖も尙今回の成績の良好なるは云ふ迄もなし。

次に比較表(二)につきて普通の幼兒の體重の増減のみを比較するに昨年の四園調査の平均一人の減少量三十匁なるに比し本年の楠の平均一人十匁の増加は好成績なりと云ふべし、これ思ふに氣象との關係に因るにあらざるか、即溫度に於ては昨年の七十五度六分なるに對して本年は七十六度一分にして大差なけれども濕度に於ては昨年の八十五度五分に對して本年は七十六度一分なり。

2. 依て今同氣象の下に行はれたる楠の園内保育と本園林間保育とを比較すれば楠の平均一人の體

重増加量十匁なるに對し林間保育の平均一人體重増加量は百匁なり。

而して梅雨期より夏季に於て幼兒の體重の増加少く反つて減少する傾向あることは既に本園の調査に依りて知れる所にして又大坂府保健課勤務醫學士竹村一氏よりも大坂市に於ける調査の結果も同様なる事を伺ひたる事あり、故に今回の林間保育成績と比較したる四園調査及楠の調査による成績も決して不良なるものにあらずして普通の状態なりと云ふを得べし。

然るに更に今回この良成績を得たるは思ふに普通の園内保育と異なる特殊の林間保育を施行せし結果なるべし、(3)然らば普通保育と異なる林間保育の優れたる點は、

一、時間

普通半日限りにして半日は家庭保育なるに比して終日保育なりしこと。

一、氣象上

高地なるにより濕氣少なかりしこと。
空氣の極めて清澄なりしこと。

溫度は通風よろしき樹蔭なるにより涼しかりし
こと。

一、環 境

園内に比して高燥にして宏濶綠樹は鬱蒼として
人爲的刺戟極めて少き良境遇なりしこと。

一、運動と疲勞と疲勞回復

運動量大なるを以て疲勞の度も大なれどもこれ
を回復するための午睡飯食ありしこと。

一、保育方法

極めて自由なりしこと。

以上を概括すれば身體の虛弱者に對しては林間
保育の最も適當なるを知るべく若しこれを普通の
幼兒に行はんには更に一層の効果を收め得べし故
に體重を主眼とすべき幼稚園保育にありては林間
保育を本體とすべくやむを得ざればこれに類する
保育法を行ふべきものなるを確信す。

十二、感 想

前述の如き目的を以て約一ヶ月に亙り實施せし
第一回の林間保育を終るに及び感じたる儘を一言
せん。

總て人爲の業たる如何に周到なる用意を以てす
るも着手の最初に在りては經驗の淺き知識の及ば
ざる等の事ありて多くは思はざるに障害を起して
豫期の結果を收め難きが常なり。

而して今回菲才無經驗の吾等我園最初の試みを
實施せんとするに當りては實に戰々恐々薄氷を踏
むの思ひありき、只專念幼兒の身體及精神の状態
に着目して臨機最善と信じたる方法を採りしのみ
幸ひに只一人の例外者を除くの外は各自豫想以上
の發達をなし、意外の成績を收め得たるは誠に有
志諸氏援助の力に由ると雖もしかも天運なりと云
ふべし、僅か一回の成績を以て直ちに結論するは
早計に失すと雖しかも都市の幼兒の體育には林間

保育有効なりとの確信を得たり。

日毎／＼に辨當かたげ憚るところなく歌ひつゝ、目的地に到達し、さて思ふさへ心地よき環境の内、に何等の拘束なき自由の天地を見出し盡きぬ自然界の材源を右より左に所置する態度の熱心なる、背に汗し顔面林檎のそれの如く見るから元氣づきこれが平素園内に於ける彼等とは何人も受取り兼ねる活動振りに晝の食事はいつも待遠く「先生、モウオベン！」これは日々十時頃より幾度か繰返さるゝ言葉なり要するに空氣の清鮮にして運動量の大なるがために食事はすすみ疲れては憩ひ日盛りは午睡に過ぎて又様々の遊戯にさて一日一度の間食に舌鼓うつ彼等の笑顔は天地何物にもたとへがたし。

特に如上の生活の間に深く又切に感じたる事は
(一) 幼児の疲勞と回復の問題なり。

幼児の活動に基く疲勞は午睡休息及飲食を適當に與へざれば子供本然の活氣を回復して十分な

る發達を遂ぐる事の難きをさとりぬ。

(二) 前説の如く保育者の幼兒との親善關係は平素に於て見る以上の母子的親愛を加ふる事なり。

(三) 子供は常々其境遇に安んずるの必要なる事を知りぬ。

多少なりとも不安の念を抱けば疲勞の回復も覺束なく到底健全なる發達をなさぬものなること即午睡の際に於ける場所につきて不安を感じるにせんか必ず安眠し得ざるなり、多數の幼兒は保姆の柔かき視線の内にて安んじて寢に入るとは云へ一二の然らざる者もあり、かゝる者も添寢によりて心を安んぜばしばらくして愛らしき寢息を漏すものなり。

(四) 幼兒相互の親密なる關係は側の見る目も心地よきばかり絶えず柔かき薰風の中に在る思ひあらしむ年長者は幼者を勞り往還の途上遊戯中或は飲食の間物品整理の際日々見馴れし目にも時に涙催す程いぢらしき優良なる感情を表す事あり

物を配つ際の如き多くは幼児の本能としてそこに競争的となるものなるにこの天地には全くそれ等の事を見出し得ず。

(五) 食事睡眠時遊戯中絶えず幼児をして氣持ち良き境遇に置く事の必要なる事そは即ち子供は一般感覺に支配せらるる事多く環境の不快なるため何となく氣のいらだつものなるが之を抑制する力極めて弱きものなるを以てなり。

(六) 此の期間の保育に於て漸々神經質幼兒の額八字皺の伸ひる事著しく接する人をして等しく快感を起さしむ。

(七) 無口の幼兒の急に快談する傾向となり時に園内の保育室に歸りし際保姆を驚かさ程元氣付きし者を生ずるに至れり。

かくの如く營まれたる十數名の幼兒の生活は全く世の常の様とも思はれず人事の刺戟めきたる何物もなき包容窮りなき大自然の内に送りし四週間の日子は短かけれどもこれ等幼兒にとりては意義

あるものたりし事を疑はず。

(右報告中多數の圖表を添へられたれども版刻の都合上割愛したり。筆者及讀者諸君に謝せざる得ず。編者)

秋の句より

世の中や鳴く蟲にさへ上手下手
鬼灯や七つぐらゐの小順禮
おりよ雁一目さんに我が前へ
向いた方へつんむいて菊の花
團栗のねんくころりくかな

——茶——